

Shirley Foster, *Elizabeth Gaskell: A Literary Life* (Palgrave Literary Lives Series). Basingstoke and New York: Palgrave Macmillan, 2002, pp.viii+202.

Paperback £15.99, ISBN 0-333-69582-8

足立万寿子

本書はパルグレイヴの「文学者評伝シリーズ」の中の1冊である。このシリーズの狙い(作家の人生を、執筆・出版・社会との関連で辿っていく)に沿うように、著者は「はしがき」でエリザベス・ギaskell評伝での検討課題を3点——ギaskell自身の好むトピックや読んだ書物と彼女の執筆との関係、当時の文学者、中でも女性文学者への彼女の態度とその人達との関係、家庭の主婦でありプロの作家であった彼女の問題——に纏めている。続く「序文」で、結婚・出産育児・地域活動・社交・教養研鑽の諸方面の生活と創作活動を「慌しさ」を極めながらも見事に同時並行して行なった彼女の人生を辿りながら、作家として地位を固めてからの彼女の出版界での交渉の経緯や努力に目を向け、作家でビジネスウーマンであった彼女の像を浮き彫りにする意図を明示している。そこで、著者が評伝執筆上重視した点に関係する箇所、また評者の興味ある箇所を取り上げ、私見を述べたい。

著者は後の作家ギaskellを生み出す背景を3つ挙げる。1つは幼少期の肉親の喪失、中でも1歳のときの母親との死別は彼女の人生における最大の不幸であり(9)*、それが彼女の裡に深く沈潜し、小説では度々母親のいない少女を登場させ、実人生でも娘の幸福を最優先するようになった(10)とみる。この見方に大抵の読者は納得するだろう。ただ、小説では親の影響や支配を脱そうとする娘の自立問題を扱い、親の娘への支配欲の不当さ・不幸さを強調するギaskellが、実生活では成人した娘たちの個人としての地位を容易に認めようとしなかった(122-24)と著者は思想と現実の乖離を指摘する。尤も評者など、子離れできそうにない彼女に人間味を感じるのだが……。

2つ目の背景として、母親を亡くしたギaskellを引き取り育てた母方の伯母

ラム夫人と共に住んだナッツフォードを挙げる(10-12)。町名は架空のものにしていてもこの田舎町を舞台にした数々の彼女の作品を思えば、妥当な見方である。

3つ目に、ギヤスケルのもの見方・価値観を形成し、執筆に大きな影響を与えたユニテリアニズムを挙げ、これが最重要の背景(12)とみる。ラム夫人を含め母方のホランド家、また夫ウィリアム・ギヤスケルの家系はユニテリアンであった。著名な科学者を多く排出したユニテリアンたちは、自然界についての新しい科学的解釈を伝統的キリスト教倫理と調和させるのに熱心であったし、非主流的存在でありながらも必要ならば進んで政治的に発言し、社会改革運動を進めた。著者は、こういう環境の中で生きたギヤスケルが労働争議や売春などの論議を招く危険な問題をも小説で取り上げ、信念を表明するのを恐れなかった(13)という。時には無謀とも思える彼女の勇敢さが彼女の個性に由来するだけでなく、ユニテリアニズムに裏打ちされているという著者の見方は、彼女の人生の根本にはユニテリアンとしての信仰があるという評者の確信と一致する。

ギヤスケルは生涯貪欲な読書家であった(17)という著者は、彼女が成人してから読んだ書物だけでなく少女時代に読んだと思われるものも主として彼女の手紙から推測(13-17)しているが、幼少時の読書の影響を過度に分析するのは危険だ(17)とみる。成人後に読んだ書物については彼女の作品に影響を与えた可能性がある故、注目すべきだ(75)といい、当時の主要雑誌、オースティン、またディケンズなど同時代の作家の小説、カーライルなどの哲学書、歴史書、地誌、伝記、旅行記、旅行案内書など(72-77)を挙げる。その他ギヤスケルがホーソーンの『緋文字』を読んだのは確かだし(137)、『ルース』はそれからヒントを得た可能性がある(138)と推測する。この決定的証拠がないのは残念だが、評者も同じ考えである。

ギヤスケルは種々の分野の書物を読み、彼女が「巧みな」小説(73)と表現する、スリリングな筋の小説を楽しみながらも、小説はある程度の道徳的有益性を具えるべきだと考え、読むときにもそういうものを求め、書く場合にもそれを基準にしていた(73)という著者の指摘から、芸術家の資質としての良し悪しは別として、良識ある市民としての彼女の姿が浮かび上がるだろう。

出版界でのビジネスウーマンとしてのギヤスケルについて、初期の短編では出版者との交渉はハウイト夫妻などからの支援を受けるが、初の長編『メアリ・

バートン』出版前後の出版者チャプマンとの手紙のやりとりにみられるように、次第に自ら行ない、譲歩と拒否による彼との交渉はのちのディケンズとの交渉を予兆する(41)という著者の指摘は面白い。彼女はディケンズ編集の雑誌に投稿する際、彼から小説の内容の変更や原稿枚数の削減など提案されても応じず、自らの考えを貫こうとした。度々衝突した2人だが、彼は何度も彼女に原稿を依頼、彼女も応諾した。彼女は彼の気前のよい稿料から、彼は彼女が儲かる作家だから(68)と著者はその理由を示す。これには、気高い作家という精神性だけを追求しない彼女のしたたかな実務面が垣間見え、生身の人間臭さも窺えよう。

ギヤスケルは短編「リジー・リー」の稿料20ポンドが送られてきたとき額の多さに驚いたが、夫ウィリアムは平静にそれをポケットに納めながらいくらかは楽しみに使っていていと約束してくれたと友人トティに伝えた(41)ことがあった。この出来事は普通、「支配する夫に従順な妻」という父権制のあらわれと捉えられるが、著者は全く異なった解釈をする。すなわちギヤスケルが鋭い経済観念を持っていたからこそ中産階級ではタブーであった金銭を話題にし、1850年代半ばには男性が支配する公の領域でビジネスウーマンとして能力を発揮するようになった(41)というものである。これは彼女の別の側面を発見した斬新な見方であろう。

他の女性作家との関係について著者は、ギヤスケルは彼女らと意見を共有し、彼女らに努力を促し、彼女らから執筆の助言や励ましを求めた(77)という。シャーロット・ブロンテなどの女性作家の中で著者は特にジョージ・エリオットの評言に目を向け、『シルヴィアの恋人たち』にはギヤスケルが小説家としての能力の点で明らかに劣等感を感じるエリオットの作品の影響がある(77)とみる。これは注目すべき見解であろう。

出会った最初から互いに惹かれ合い、性格などの相違(114)にもかかわらず友人となったギヤスケルとブロンテに関連して、20世紀の評論家の間で、ギヤスケルが『シャーロット・ブロンテの生涯』(以後『ブロンテ伝』と略す)でブロンテの女らしさを強調する余り、ブロンテの創作発想のユニーク性を曖昧にし、真実のブロンテ像を歪めた責任がある(118)という主張がなされてきた。その背景について著者は、1つはギヤスケルがブロンテを知るにつれ、その存在が次第に謎となり、ブロンテを理解するのに社会的・ジェンダーの典型に当てはめよう

としたためかもしれない(118-19)と推測し、もう1つは、ギヤスケル自身認識していた問題——女性の家庭の義務の遂行と作家としての仕事との調整——に苦悩するブロンテが自らの興味を犠牲にし、家事を優先したとギヤスケルが強調したためだろう(119)とする。この問題について著者は、ギヤスケルがトティへの手紙で訴えているギヤスケル自身のジレンマでもあった(113)とも述べている。ここで評者が感じるのは、ブロンテ愛好家によるギヤスケル批判を認めつつ、弱点を含めてギヤスケルを受容する著者の深い愛情である。

批評家・小説理論家としてのギヤスケルについて著者は、彼女がハーバート・グレイに与えた忠告——小説は余りに内省的になってはいけない、デフォーの「健全な」小説を手本にするように(71)——を挙げる。ヘンリ・ジェイムズがギヤスケルの小説手法について、「彼女は外面描写の積み重ねで作中人物の内面を描こうとした」と評しているが、著者の例示はこれに通じるものであろう。「プロットは成長して危機で頂点に達さねばならない。事件のこの進展に寄与しない人物を導入してはならない」(71)というギヤスケルのプロット論、また小説家は自らがあらゆる場面の観客か聞き手だと想像し、小説の諸要素の道徳的傾向を常に意識していなければならない(71)とする彼女の創作態度は、彼女の作品を分析・研究する際にも有益だろう。

ギヤスケルの作品自体についての著者の論述は、評伝の重要部分をなす。彼女のすべての長編6作と中編『親戚のフィリス』、そして『ブロンテ伝』の各々を取り上げ、先行研究などに言及しつつ著者自身の見解を詳述する。その他の中・短編とノンフィクションについては、知名度の低いこれらに手法上の実験が試みられているなど彼女の作品の様々な要素が見られるため(vii)と理由を説明し、本書出版前で目を通せるものはすべて取り上げ、各々の概略を述べ、特徴を指摘する。

ここで評者は、著者が高く評価するギヤスケルの最後の2長編に注目したい。まず『シルヴィアの恋人たち』では、時代設定について著者は、歴史的イベント(国家レベルのナポレオン戦争、地方レベルの強制徴募執行と抵抗)の背景が個人の義務と自由との間の葛藤をイメージするように仕組まれており、社会的法的束縛と個人の自由の関係を広い視野から俯瞰できるようにしている(158)と優れた小説手法を指摘して、「束縛と自由」の問題に切り込んでいく。この問題はジェン

ダーの文脈でみると、「行動」する男性に対し、女性は受身で無言で「無行動」の存在 (159) として描かれており、フィリップの「貪り食う」(160) ような視線を感じて金縛りになり、婚約撤回の発言も行動も抑えつけられるシルヴィアを例に挙げる。ここに、「男性の支配・行動」対「女性の従順・無行動」を男女の本来の姿だとするジェンダー・エセンシャルイズムにメスを入れ、挑戦しようとする (159) ギヤスケルの姿勢が窺えるという。しかし最終的には、臨終を迎えたフィリップと駆けつけたシルヴィアが互いに己の罪を認め相手を赦し和解し合う場面を挙げて、赦しと理解により和解と道徳的啓発は常に可能だ (160) というギヤスケルの信念を読み取る。著者はすでに「第1章」で、「寛容と赦しを信じ、和解の原則として個人的接触と理解を重視する」(12) クリスチャンとしての彼女の基本的態度を示しているが、「束縛対自由」、「男性対女性」という2項対立のテーマがギヤスケルの信念によって止揚されたと考えられるこの論に、評者は同意したい。

もう1つの『妻たちと娘たち』について評者が注目するのは、著者が本小説のテーマの1つが階級間問題 (168) であり、もう1つがジェンダー問題 (169) と捉えていることだ。前者について著者は、広い社会層 (貴族、地主、中産、庶民の諸階級) をカバーするこの小説において、ギヤスケルが階級の変化を示すのに進化論的發展思想を踏まえている (168) という。家柄重視の結婚を絶対視していた地主ハムリーが長男オズボーンと召使い出身のエーメの結婚を次第に認めるようになり、ダーウィンを思わせる生物学者の次男ロジャーが階級の下モリーと結婚するのを望むようになる。長い紆余曲折を経て地主の思想が民主的方向へ進んでいくのは種の進化の過程を思わせるが故に、著者のこの論は納得されよう。後者の問題は3人の女性——社会の作ったジェンダー観を利用して生き残るミセス・ギブスン、夫に興味を抑えられ封建的ジェンダー観により命の火を消していくミセス・ハムリー、自らの努力とロジャーとの結婚によって社会が作った性別役割より進んだ段階に入っていくモリー——に体现されており、ギヤスケルは固定化された階級間区別に対すると同様、ジェンダー・エセンシャルイズムに異議を唱え、挑戦している (171) と著者はいう。人類の長い歴史的発展を考慮した著者のこれらの見解は、巨視的な作品研究法を啓発してくれるだろう。

ギヤスケル夫妻は1860年代には殆ど別々に休暇を過ごし、妻は夫に内緒で邸宅「ザ・ローン」まで購入した (124)。著者は、これは決して夫婦の結婚の破綻

を意味するのではなく、妻ギヤスケルの独立性をあらわし、彼女は邸宅購入を経済的自立の象徴とみていたのだろう (124) と推測する。最後の2長編においてジェンダー問題に挑戦し、当代には稀なほど夫から信頼され自由を認められていたギヤスケルだけに、もし生きていたら著者の推測に「その通り」と頷いたことだろう。

以上、本書はギヤスケルの人生での出来事、彼女が追究している小説のテーマ・手法や特徴、また先行研究が重要なものはもろさず言及されており、引用は極力入手しやすいペーパーバック版からされており、適切なギヤスケル入門書といえる。一方、本書出版前の新情報への言及、説得力ある著者独自の見解は優れた本格的な研究書となっている。人間ギヤスケルの面も浮かび上がらせた本書は一層ギヤスケル愛好家を増やすことだろう。本書最後のギヤスケル批評史 (171-74) はギヤスケル研究の推移を要約しており、今後の方向を示唆してくれている。

* () 内の数字は本書における頁数を示す。以下同様にする。

シャーリー・フォスター氏は2012年4月アラン・シェルストン氏の後任として英国ギヤスケル協会会長に就任、当協会初の女性会長でもあることを付記する。

(ノートルダム清心女子大学非常勤講師)